手記

鳥取県　横川茂男

戦争が終って既に六十年の歳月が過ぎた今日、年と共に物覚えがとんと悪く、また元来記憶力の乏しい者が今日、当時の記憶を遡るのでハッキリ言って少し冒険ではと思いつつ、勇気を出して記述しようとしていますので、その辺のところを考慮に入れてお読み下されば幸甚と思います。

さて小生、鳥取市から約四里あまり入り込んだ山里の町、船岡に生れたのは大正十三(一九二四)年であります。水呑み百姓の小せがれで、男五人、女二人の五男坊主として生れました。地元小学校を卒業するのが普通で、学校を出れば早急に外に出て職を求めるのが当時のならわしのようなものでした。家は農家で八反の水田に米作りをするも苦しい生活であり、近くに所有の山があったため、これを開墾して果樹栽培をしていたが、なお生活は苦しいため長男は地元にある畜産組合に奉職、ようやく生活をしていた状況でした。長女や二男三男は大阪に、また四男は志願兵として軍人に、下の姉と小生だけが親元にいたわけです。その頃まだ祖母も元気でした。小生は地元の郵便局に世話になりつつ広島逓信講習所に入所、宮島の学校に宿泊しつつ海水浴を。その時父からの便りで南満州鉄道株式会社の入社試験を知り、早速受験したところ合格となり、二年間国鉄の見習いで委託生として近くの駅、車掌区へ勤務、無事講習期間を終えて満州国へ出発したのです。

神戸港から朝鮮釜山を経由して目的地入り、当初中央部の四平街の駅へ着任。数日して会社の勉強のため、奉天駅へ講習所入り、一応の知識を習得して、一旦四平街の駅に帰りましたが、会社の計画による通信技術の講習を受ける事となり、今度はもっとも北部の都市ハルピンへまいりました。ハルピンは国際都市とまで言われた街だけに白系ロシア人も多く、街の様子も全く変り、コンクリート造り西洋風の建物で日本では見かけぬものばかり、なんともあか抜けた街並で、気分も爽快な気が致しました。街の一面には大河松花江が流れ、夏ともなればハルピンの街は正に水の都のごとき風景、何かヨーロッパの地にいるような気持ちでした。

半年間の講習を終え、いささか名残惜しい気持ちがありましたが、今度は正規な職場への配属となり、北満の北満斉斉哈爾鉄道局管下チチハル電信所へと配属となりました。大都会と満鉄の中心であるため当然局あり電信所あり、あらゆる中枢機関なり政府の公共施設も数多く、正に北満の大都市でした。従って人口も数十万、日本人も数万人はいたでしょう。学校卒業以降数年は経ち、二十一歳の年齢を迎えるにあたり徴兵検査を受ける事となり、チチハルの地で検査を受けました。体には一応自信がありました通り甲種現役兵の工兵として採用される事になったわけです。当時日本は大東亜戦争の真只中であり、中国戦線そして南方方面各国との戦況も目覚しい戦果が報道されていたのです(大本営発表)。

チチハルに配属されて間もなく、人事の関係か支線に入った田舎町で拍根里駅に数カ月勤務致しました。田舎の山の中のような所でしたので、再々土賊が出没していたようで、小生在職中は一度も出た事はありませんでしたが、いつ出るか分かりませんのでいささか心もとない気持ちがありました。従って直接銃を放った事もなく、むしろ人生経験の上ではいい経験をしたように思っています。数カ月の後入営準備のためチチハルに帰ってまいりました。

入営の期日が来ましたので指定の場所、北安北部孫呉三〇師団に入営致しました。大本営の報道とは裏腹に戦況はいささか雲行きが違い、各戦線ともに苦戦というか、所によれば全滅の場所さえあったようでした。小生達が入営した時も何か内部が複雑なような気も致しました。入営当時も部隊がはっきりせず、さまようような姿に見受けら

れたのです。兵器も不足し、銃も無し、編上靴等は地下足袋が支給された始末。後で考えればその頃から満州にいる部隊には兵器はほとんど皆無であったように思います。入隊後一期の検閲があるのですが、八月九日ソ連の参戦で急遽戦闘準備のため迎撃に適した小高い丘の上の平地花見山に向って出発しました。何分初年兵で軍の事はほとんど皆無の状態でした。出発する前からではありますが、自分達の部隊の存在さえはっきりしない有様であり、何一つ分からぬままの戦闘配備で、あまりにも軍の規律の乱れが激しいものでした。花見山では上司の言うがままに壕の中に戦友と二人待機の構えでいました。この間戦争らしいものは全くなく、敵戦闘機が定期的に飛来して機銃掃射をする。初めての経験で恐ろしいものである事を強く感じたものです。これら敵の空襲に対しても我が軍には何らの反撃する姿は全く見られない。つまり戦闘状態なれど戦いにあらず、勝ち負けを論ずるものにあらずであった。一方に戦闘行為がないものに勝ち負けもないものと思いました。

八月十五日終戦に際しても、別段伝達があったわけではなく自然の状態で何となく聞こえたもので、敗戦を聞いたときも何らの感激もまた混乱もない、何かずるずるとなすがままの状態で、何とも言えぬ気持ちであり、他の部隊の様子はどうであったか分からないまま、何らの指示を受ける事なく陣地を後にしたため現地解散のような状態で、武装解除も自然のままで行われたため居場所さえ定まらず、集まった者同士の混成された団体のようなものでした。従って、他の部隊の行動は別であるが、私達の場合は何らの拘束も受ける事もなく、ソ連側からの特別な事もなく、現地住民との接触もないので何らの被害もなく入ソの一歩を踏み出したのです。

現地から黒河までの距離も分からず、汽車、他の乗り物を使用する事なく徒歩による行軍であり、昼夜の行軍のため途中適宜休息するもいささか疲れを感じると共にできるだけ一つでもと持参した

物は途中一つまた一つと投げ捨てる有様、すべてを失う始末でした。水分だけはどうしても補給が必要であり、道中の水溜り場で補給したが、これが大変で、朝明るくなって見ると水は汚水で人畜の腐食の汚物が混入したもので皆が愕然としたものでした。誠にもって言葉に表せぬ有様、戦争の敗北者の姿そのものであったように思いました。

数日後目的地黒河の街に到着しました。街も初めてであったが黒龍江に沿う港町で闊達に栄えた街のようであった。一両日滞在して戦利品と共に一緒に乗船、約四キロの黒龍江を横断し対岸の街でシベリアの極東の大都市であるブラゴエチェンスク市に上陸した。街の一角には鉄道が引き込まれ、我々が乗車する貨物車が待機しているようでした。順次貨車に乗り込みましたがすぐ下車するよう命令があり、そのままブラゴエの街にとどまったのです。街の広さや人口等は定かではありませんが、想像以上の大きな街のようであった。学校の校舎のような建物の中で暫時待機させられ、

ほどなく収容所に移動させられた。我々の収容人数は約二千人ぐらいと聞きましたが、一応この施設によって抑留された事になります。入所してその日は室内の整理その他の作業でその夜を過したわけですが、翌日は農作業に出発しました。

九月中旬頃と思いますが、朝夕めっきり寒さを感じます。朝夕の寒さも非常に強く感じるようでした。この頃は農作物の収穫期に当り、ちょうど馬鈴薯、トマトの収穫のようで、現場に向って出発したわけです。満州にいた私も満州の広さを強く感じていましたが、シベリアの作物の状況を見て格別にその広さを感じさせられました。目の届かぬ地平線のかなたまでという言葉通りで、いささか気の遠くなる思いもありましたが、何分作業の内容が食べ物の収穫、馬鈴薯、トマトと食欲をそそるものばかりであったため、作業には力が入りノルマも充分果たしたようです。現地ロシア人も作業員に対しては別段の抵抗もなく、食事は充分とれ満腹の状態で帰路についたものです。半腰

状態の作業のため腰の痛みは格別でしたが、帰路の途中は毎回軍歌や流行歌などよく歌ったものでした。数日間の作業で収穫作業は終わり、仕事の内容が変って今度は街中の特別の家の勤労奉仕のようなもので、指定された家々への作業となります。仕事の内容は屋敷内の掃除や薪割り作業が多かったようです。

各個の奉仕作業について特に感じた事があり、特筆致します。個々の家庭でそれぞれ異なり、また各個人の性格環境で色々変るとは思いますが、終戦六十年を経過した今日でも強く感じ、忘れ得ぬ出来事として今日まで持ち続けている事がありました。それは奉仕中、昼食時に家族からの誘いで室内で家族の人達と一緒に食事をした事です。同じテーブルで同じ食事をする事です。今思えば昼食を同じテーブルでする事ぐらい別に特別な事ではないではと思うわけですが、当時の環境、身分の相違から来るものの考え方等で、いやいやそうではない、戦時中、戦争で負けた国と勝った国の国民の立場からくる判断行為の中で、同じテーブルでの食事の出来事等は普通ではない。人それぞれの意志の持ち方にもよるが、やはり人間性の問題が大きくかかわって来るものと考えるわけです。急に素質や人間性が変るものではありません。やはり生まれ育った性格はもちろんの事、素質性格にも環境の変化によって育まれて行くものと考えます。特別にご馳走があるわけではありませんでしたが、やはり食事そのものに温もりがあります。私達の食事は一回にパン二〇〇グラム、スープ飯盒に半分めぐらい、時折他のものが付くぐらいです。パン、スープ以外は特別な日だけに限られたものでした。でもうまみが違います。スープには中身がある、味が違う。食事は故郷の母親の手作り料理を食した気持ちでした。やはり忘れられぬ思いがしたもので、いつまでも記憶の中に残るものでした。

当時日本人女性がアメリカ兵の捕虜に対しフェンス越しに、汚い汚らわしいという言葉を発した

事が新聞に出た事があり話題になったと思います。捕虜が故に些少な気持の持ちようもありますが、日本人の性格からしてロシア人の人情味豊かな人柄とは比較のしようがありません。人間かくあらなければならないと考えます。

やがて奉仕作業も終わり、十二月を迎えると寒さも殊更に厳しく、温度は既に味わった事のない寒さになってきました。零下四〇度は普通で、体感温度六〇度という寒さが再々やってきて、身の置き所を感じていました。丁度その頃高熱に侵され死亡した戦友が日を追って増え続け、発疹チフスの発生を知る事になります。急性なチフスで毎日患者が増加し続け、急遽作られた隔離病棟（収容所の一角に急遽造られた病棟）が不足の状態でした。我々の中隊長殿もチフスに侵され異常な高熱でついに脳症にかかり、熱のためか凄い力で踊り狂乱状態となり、その場に転倒され即死の状態でお亡くなりになりました。脳症は怖い危険なもので皆が心配したものです。長い独ソ戦ですべてのものを失ったソ連邦に何が残されたのでしょう。その日の食事さえままならぬソ連国民であり、大切な医療施設があろうはずはありません。もちろん医薬品も事欠き、ただ熱を下げるための氷を使って冷やし続けるだけの事。下痢症状には施すすべもなく、熱湯を腹部に当てて温めるだけの治療でした。

十二月三十一日、入ソした年の大晦日、いつものごとく戦友の氷を取りに黒龍江の支流ゼイヤ川に出て帰り、戦友の看護を終えて帰りました。翌朝は元旦です。別段何事もなかったのですが、丁度入ソ間もない頃であり、満州からもち米が持参されたらしく、一人当たりぼた餅二個の割当があり祝餅としていただいたわけです。食事が終る間もなくその場に倒れ、意識がもうろうとなり、チフス感染と決まり隔離棟に入所する結果となったわけです。まだ意識は少しある状態で裸体となり消毒されて寒中無蓋車のボデーに投げ込まれた時をはっきり覚えております。そしてどこか他の施

設に転送されたわけです。後で聞いたわけですが、この時患者の一人一人を診察して、生きる見込みのある者、ない者の区別をして処置されたようです。この時の処置の結果私は今日八十二歳の生命を今日まで見る事ができたわけです。

新しい施設に入れられて約一カ月と推定しますが、ふと目が覚め生きている事を確認したわけです。腹部の辺りが痒くて看護婦さんに訴え診てもらいました。腹の中は傷だらけで、やけどの治りかけでした。治療の結果良くなりましたが、六十年の経過の今日でも腹一面に火傷の跡が今なおはっきりと残っています。ようやく快方に向かいつつあるので異存はありませんが、未だ患者は続き入院されつつありましたので早期退院を迫られ早々に原隊復帰の状態となりました。消毒を意味して収容所風呂に入ったのですが、目が回りいたたまれず早速風呂を切り上げ寝床に休みました。

ソ連上層部の指示によるもので、我々捕虜仲間の中で特殊技術を持つもの同士で自活生活をさせるべく色々の技術者（自動車運転手、大工、左官、縫製工、そして画家）の希望者を集め自立経営をすべく準備が進められ、希望者集めが始まりました。私もちょうど退院当初で体力的にも現在では一般労働には少し無理があるため、少しは過大評価の意味もあるが駄目でもともと画家の希望を出したところ、余り抵抗もないまま収容所長の了解が得られたのです。早速技術者の仲間入りを果したわけです。自活工場は現在の収容所とは多少離れた場所にあり、収容所としての条件も誠に簡素で環境的にもまた気分的にも非常にリラックスした気分で生活に入れる事を感じ、本当に良かったと思い、長生きができる気持になったものです。結局は特殊工場に移転した仲間は五十人で新しい生活が始まったわけです。

同じ収容所内の事であり、今少し記憶がよみがえるべきですがほとんど思い出せません。自分自身の生活のみ思い浮かべるのが精いっぱいのようです。収容所内の部屋の一部を改造して画廊なり

縫製工場、大工部屋等に改造されそれぞれ専門の器材や設備ができあがり、それぞれの仕事を始めていきました。画廊にもあれこれ作業があり絵を描く気分にならず気が急くばかりでしたが、やむをえず仕事の先送りとなりました。私達の仲間も色々で日本画専門、人物専門、私にはよく分からなかったがアカデミー系とか在野系とか言われておりました。私は全くの素人でただ目に映る風景をそのままに描くだけ、ただロシア人の多くは海を知らない。水にあこがれている国民だけに山水の絵が案外好まれて私には非常に好都合でした。白樺の木をはすかいに切ると絵を描く部分が案外多いので壁掛け用に多く描きました。これは私の縄張りのようなもので、他の人達は皆専門的な立場で仕事をされたので案外ロシア人にはピンとこない点があり、時折意見の衝突がありました。絵具、絵筆、カンバスすべて皆間に合わせ品であり、本式のものではありませんので、あれやこれやでトラブルもあり、苦労は耐えませんでした。でも

二年あまり何とか月日も過ぎ、頭の中で思い出したもの、想像したものとやりくりしたが、やがてすべて出し尽くした頃、当番の歩哨に了解を求め柵外近くの風景のスケッチ、段々と広範を求めて外出したものです。当時の事もあまり記憶が定かではありませんが、一度街で映画館に入った事もありました。ロシア人から日本の捕虜がどうしてというさまを見て、早々に映画館は出ました。また、バザール、自由市場にも時折出向き、描いた絵と食料品の交換をしてもらった事があります。これらの外出行為は本部のナチヤニク収容所長には内密の話です。

我々の工場は町の真ん中にあるため周辺はロシア人の居住であるわけです。どの家にも老若男女が数多く居住しており常に接触がありました。夕方になると労働時間から自由時間になります。各家庭には案外音楽を好む者が多く、周辺の広場を求めて集い、ダンス等をいつもしていました。

抑留者の生活実態はそれぞれ場所も就労内容も

異なるため一言では言えませんが、いずれにしても極寒の地での作業でありすべての点が不備の条件の下でのことで、一口に言えば全くもって言語に絶するものであり、具体的に言うなれば先ず収容所の設備等環境面も悪く、一事が万事というところでしょう。食事も一応一日に三回であるが何分量質共にお粗末で、黒パン二〇〇グラム、汁は飯盒に半分はあるが中身は全くなく、ただ湯に色がついているようなもの、口に残るものなどありませんでした。もちろんその他の具は一切皆無。時折り塩漬けされた魚が祝日等に一切れつくのが珍しい事でした。その結果というか全員ではないが鳥目になる、いわゆる極端な栄養不足で困りました。昼間は差し支えないが、夕方、夜はよく小便つぼに落ちたものでした。衣類等、日常生活にかかわる必需品も一切支給はありませんでした。温かい夏季には時折洗濯等もしましたが、秋から冬にかけ寒さが感ぜられる頃は一切できませんので、身の回りの物はどうにもなりませんでした。

もちろん替衣等は一切支給されたものではありません。いわゆる着たきりすずめというところでしょう。不足や不満を言えばきりがありませんのでやめますが、一面ロシア人の生活自体もあまり贅沢はできぬ状況のようでした。考えるにあの大国ロシアもあと一歩で国が滅亡する寸前の独ソ戦のように見受けたものです。従って日本人の生活から見れば当然の事は当然のように要求したいものですが、ロシア人自体の生活を見ればあまり無理の言えたものではなかったと。ただ労働面ではブラゴエに残留された我々は、他の戦友達のように炭鉱とか鉄道、道路、建設、木材伐採等従事した人達と比較すればありがたい事と感じております。

次に民主教育の件であるが、この事は特別に除外されるものではありません。すべての抑留者は否応なしの教育であり、我々も頑張りつつ勉強をさせられたものです。特に私達力仕事に従事しなかった者達はありがたいことでした。この頃の事少し記憶が薄れていますが一応組織らしいものは

あったと思います。

理論的な問題は宣伝部、文化部等ありました。私は無学者でありマルクス・エンゲルスのごとき哲学は分かりませんでしたが、捕虜仲間の中に大学出身者がおられ説明する。ソ連が強く求めたものの中には共産党小史の勉強でした。文化部は心ある人が指導的立場にあって色々演劇を見せてくれました。また、日本軍のありし頃の徹底追求で当時吊し上げと言っておりましたがよくやられたものです。当時日本新聞と言って日本の最近の動きを知らせる報道があり、時折ハバロフスクから送られて来たように思います。郵便ハガキも一度父親あてに発送したが返答もなかったようです。

そうこうするうち帰国の連絡があり帰途に付いたわけです。ブラゴエからナホトカまでの距離はどのくらいか分かりませんが四、五日の旅のように思っております。何かの都合でしょう、半日ぐらい滞留した事がありました。他の列車の支障にならない行程での輸送であったと思います。途中

何事もなく無事ナホトカ港に到着し、一定の施設に収容され、この間あらゆる検査を終了し乗船の運びとなったわけです。乗船時もまた船中も別段異状もなく一路日本へと帰国致しました。

船中の食事、ことに味噌汁の懐かしさは忘れることはできません。

船員の方また従業員の女性の方、目に映るものすべてが懐かしいものばかり、いよいよ日本に帰るんだなという実感が初めて身をもって感じたものです。舞鶴港に到着して上陸準備のための検査諸手続きを終え、いよいよ生まれ故郷の村に向って出発したのです。事前に帰国の連絡をして、途中車窓より日本の風景を見ながら一路鳥取へ鳥取へと帰ったものです。

故郷の駅に到着したのが午後四時過ぎだったと思う。別段村人の出迎えがあるわけでなく田舎ゆえの淋しい乗降客に混じって降り立ちました。父貞三がただ一人の出迎えです、淋しいものです。敗戦であり捕虜の帰還の姿、いささか複雑な気持

もあったように思います。父の姿を見ても、嬉しさも何か世間様に申し訳ないような気持があるのではとさえ考えた次第です。

【執筆者の紹介】

大正十三年二月七日　鳥取県八頭郡八頭町生
昭和十三年　船岡尋常高等小学校卒業
同　広島逓信講習所中途退学
昭和十四年　南満州鉄道株式会社入社
昭和二十年　孫呉工兵隊入隊
同　九月　武装解除　ブラゴエチェンスク市抑留
昭和二十三年五月　復員
昭和二十六年　船岡町役場　就職
昭和五十三年　同役場　退職
昭和二十七年　土地家屋調査士、行政書士
平成十年まで　同業務
昭和五十四年～昭和六十四年　船岡町社会福祉協議会　就任した役職　船岡町民生課長　社会福祉協議会事務局長　船岡町身体障害者福祉協会長、同県協会監事、郡協会副会長　全抑協鳥取県連合会船岡町支部現事務局長

（鳥取県　松下　盛一）

ソ連軍対戦とシベリア抑留

鳥取県　清水要範

ソ連軍進攻と対戦

ブルブルプス、ヒューン、機銃の弾が頭上を、そして足元に、さながら雨か霰のように。

私の所属する独立連射砲第三十一大隊二中隊は歩兵大隊に配属になり、東満国境付近で陣地を構えソ軍の進攻を阻止するため待機した。昭和二十（一九四五）年八月十二日の朝、敵戦車の到来で発射した連射砲は一発、二発命中して白煙が上る。「擂座したぞ」喜んだのも束の間、やがて戦車から討ってきた砲弾の破片でＳ一等兵が負傷した。それを機に後退を余儀なくされた。なだらかな斜面は身を隠す何もない。さすが古年兵は動作が早く、辺りに人影は見当らない、と眼前に、転んでは起きしている先程負傷した戦友の姿が、見捨てるわけにはいかない。肩に担ぐように最早姿勢を低くすることもできない。弾丸が当たらぬのが不思議なくらい、ようやく山の麓の木の陰に、百メートルばかりの距離が何キロメートルにも感じられた。そこからは急斜面、背負って登ることは無理だ。意識もほとんどないようだ。幸いあちこちに蛸ツボがありその一つに体を押し込んだ。

山の中腹には深さ一メートルぐらいの塹壕が掘り巡らされている。先に登った人影もちらほら、気持が少しは落着いた。木の間から見える山の下の道は敵の戦車や自動車が突っ走る。時折り道端の蛸ツボから肉攻班が戦車の前へ、そして轟音と共に黒煙が三十メートルぐらい上る。止まった戦車はしばらくして動き出す。あとには人影も何もない。捨て身の攻撃も効果はないようだ。

山の裏側には既に登った連中が集結していた。その数は三分の一ぐらいで、残りの消息は分らない。山を囲む道路から絶えず砲弾、機銃弾が撃ち込まれる。軽快な音は自動小銃だという。蛸ツボに身を置きながら時を待つ。夕暮れになり放置し